

プロダクトサイクルと世界の所得分配：再考

要旨

本稿は、熟練・未熟練労働の区別を含む南北貿易モデルを用いて、各国の労働供給量の変化が一国内の所得と南北両国の所得分配に及ぼす効果を分析すると同時に、北や南で行われている職業訓練を通じた熟練労働の供給量の増大が経済成長に及ぼす影響を分析している。こうした分析は、Krugman(1979)や Grossman and Helpman(1991a)を初めとするプロダクトサイクル・モデルに、生産活動にしか参加できない未熟練労働と研究開発（模倣活動）と生産の両方に携わることが出来る熟練労働の区別を導入した Lai(1995)でも行われているが、本稿のモデルはそれを拡張し、Lai(1995)では得られなかった結論を導き出している点で異なる。本稿では、南の模倣活動の生産性が、南が生産するバラエティ数ばかりではなく北が生産するバラエティ数にも依存すると仮定することにより、Lai(1995)モデルを再考し、幾つかの現実的で興味深い結論が得られる。特に、熟練労働を増やそうとする北の努力がイノベーション率の上昇や南北間の所得格差を導くことが示される。